

満洲文字

■概説

満洲文字（17～20世紀）には、無圏点(ムケンテン)満洲文字と有圏点(ウケンテン)満洲文字の2種がある。無圏点満洲文字はモンゴル文字を大体そのまま使って満洲語を表記した最初期の文字である。いっぽう有圏点満洲文字は、天聰六年（1632）に皇帝より文字改革の命をうけた達海(ダハイ)が、従来の文字に丸印（圏という）や点を加えるとともに、新たに幾つかの文字を作って満洲語を表記したものである。その満洲文字で記された資料は膨大な量にのぼるが、およそ2種に大別することができる。ひとつは満洲語資料。今ひとつは他言語を記した資料である。後者の中心は何といても漢語である。漢語の横に振り仮名のように満洲文字を付したものと、満洲文字のみにより漢語を記したものがある¹。この満洲文字のみで漢語を記した資料は、1音節毎に分ち書きされ、単語など意味の切れ目に対応する分ち書きがない。このような音節毎の分ち書きの出現は、言うまでも無く漢字漢語を表記したことによるものであり、漢字の影響といえよう。

その他、満洲文字には篆書体もあり²、これも漢字の篆書体に学んだものである。

■無圏点(ムケンテン)満洲文字の資料。

清の太祖ヌルハチが天命年間(1616-1626年)に発行した銅貨。縦書き。左→右→上→下と読み進む。abkai(天の)fulingga(命を持つ)han(王)jiha(銭)とある。“天命汗銭”と通称される³。



満洲文字天命汗銭（古代文字資料館所蔵）

¹ 吉池 1998 参照。

² 汪玉明 1993, 1996 参照。

³ 寺澤 2004 参照。

■有圈点(ウケンテン)満洲文字の資料。清朝宣統三年(1911年)発行の銀貨。縦書き。左より右に読み進む。gehungge(明瞭なる)yoso-i(原則の)ilaci(第三の)aniya(年)とある。



大清銀幣 (古代文字資料館所蔵)

参考文献<発行年順>

汪玉明 1993, 1996. 「満文篆字研究(上)(下)」, 『中国民族古文字研究(第二輯)(第四輯)』天津古籍出版社、288-290頁(上)、43-63頁(下)。

吉池孝一 1998. 「満洲文字音写「法華経普門品」(東洋文庫所蔵写本)について」, 『東洋哲学研究所紀要』第14号、(61)-(78)頁。

寺澤知美 2004. 「“天命汗錢”について」, 『KOTONOHA』第20号。

(文責: 吉池孝一.2010.2.16)